



桐生新川球場跡（現：新川公園）

**戦後プロ野球「夜明けの地」として球史に記録
数々の熱闘と感動を呼んだ球都の聖地**

鮮やかな緑の芝生が一面に広がる憩いの場、新川公園。その東側正門付近に建つ、象られた白球を添えた記念碑が物語るように、この地にはかつて「新川球場」として親しまれた、球都を代表する野球場があった。

新川球場の開設は昭和3年11月に遡る。前年の桐生中（現・桐生高校）の甲子園初出場に沸くなか、桐生市体育協会の初代会長に就任した実業家の堀祐平氏が私財を投じ、野球場のほか陸上競技場やテニスコート、プールを併設した「新川運動場」を開設。後に施設一切を市に寄付し昭和12年から市有施設となり、終戦から僅か3か月の昭和20年11月には、「戦後のプロ野球の夜明け」と語り継がれる歴史的な日々を迎える。

知将・稲川東一郎監督のもと結成された戦後初の社会人野球チームとされる「全桐生」が、プロ野球の新興球団・セネタースと11月18日に新川球場で対戦。この試合は戦後日本で初めて再開されたプロ野球の試合として記録に残る。その6日後の11月24日には、現在のオールスターゲ

ームの前身にあたり、戦後のプロ野球の実質的な幕開けとなる職業野球東西対抗戦の第2戦を新川球場で開催。続けて翌25日に行われた「全桐生」と職業野球「東軍」の試合では「全桐生」が勝利し市民に歓喜を呼ぶなど、戦後の混乱が続く世に希望の光を灯す球音と声援が、いち早く桐生の地でこだました。

昭和22年のカスリン台風被害を乗り越え、昭和36年に野球専用施設となり「桐生新川球場」に改称。老朽化で閉場となる昭和62年まで、この地で数々の熱闘が演じられてきた。野球場跡地は夏場に水遊びができる親水施設や野外ステージなどを備え「新川公園」として再生。令和4年には野球の日本伝来150年を記念した「野球の聖地・名所150選」に選ばれた。球史に刻まれた「球都桐生」象徴の地は、

今は市民のオアシスとなり、子どもたちの元気な遊び声とともに、桐生の街に息づいている。

桐生新川球場跡（現：新川公園）
●住所／桐生市稲荷町1-444